

イスカリオテのユダとイエス

序

ここに記した文章は、昭和四十八年四月から七月まで、左京教会週報に九回にわたり連載したものです。

イスカリオテのユダを語るに於て、私自身満足した文章であるとは、とうてい思えません。

しかしイスカリオテのユダの生と死は、イエスを裏切った悪魔的な人間のそれであると安易に思ってしまうことは誤りであり、むしろ神を喪失した誠実な一人の人間の壮烈な生と死の象徴であるように思ひます。

それはとりもなおさず、なにほどか誠実に生きようとする現代人の生と死そのものであります。

もし我々がユダ以下の生を今日歩んでいるならば、ユダの生と死に、敬意をはらわなくてはなりませんし、ユダを乗り越えて生きようとすれば、イエスの生と死、を見て、その

復活を押し見る必要があります。

このようなことを考えながら記したこの貧しい文章に眼を通して下さるなら、ありがたいことだと思えます。

松 下 昌 義

イエスを最も徹底した歴史の先駆者の一人として理解しよとする、イエスについての認識（例えば田川建三「イエス―逆説的反抗者の生と死」歴史と人物四十七年八月・十月号）は、聖書的にも、歴史的にも正しいのではないかと思えます。

歴史の先駆者は、その時代に埋没同化しないで、歴史の進むべきかなたを自覚的に、直感的にか先取りする者であり、従って、当然のこととして、その時代の現状を厳しく批判し、否定し、拒否するよきな生き方をします。

それ故に、歴史の先駆者は、その時代を肯定し、自己にとって都合のよいようにつくりあげた体制の中で、権力をほしいままに行使する体制の支配者からは悪人扱いされ、時として抹殺されかねません。

また、その時代の中に自己を埋没し、その時代の精神に支配され、体制に己れをゆだねて生活している^象太象からは変った人間として見られ、その思いの深くを理解されぬままに

見捨てられてしまいます。

このように、大衆からは理解されず、権力者からは悪人として抹殺され、歴史の中から消え去って行った人間が過去に、どれほど多くいたかわかりません。

右の如く反省しつつ、今一度政治や宗教、文学や芸術の世界をひもどき省みることは、現代を生きる私たちの生き方や在り方に大切な指針となるのではないでしうか。

いづれにしても、イエスは歴史の先駆者として生きたが故に権力者により殺され、民衆から見放され、十字架上で死なねばならなかつたのであります。

従って、イエスの死は、歴史の先駆者としての謂わば宿命であり、当然たどらねばならない運命であつたのだと申せます。

イスカリオテのユダを考えると、こうした歴史の先駆者としてのイエス理解にもとづき、そのイエスとの係わりのなかで考えられなければなりません。

ですから、イスカリオテのユダを只の貧欲な男で金銭に目がくらみ、イエスを権力者である祭司やパリサイ人達に買り渡した男だと単純に判断してしまふことは誤りであります。

ヨハネ福音書やマタイ福音書の著者達は、このようにユダを理解させようとしているようです。(マタイ 26・15、ヨハネ 12・6)

ましてやユダの中に「悪魔」が入った(ルカ 22・3、ヨハネ 6・70、13・27、行伝 1・16)からユダが悪魔の手先となつてイエスを裏切つたなどという解釈でこと足れりとすることは、宗教的独断もはなはだしいと言わねばなりません。

このようなユダ理解のしかたと、それに伴うイエスの死えの導程理解は、イエスの生と死とを宗派的な狭い世界の中にとじ込めてしまい、イエスの生そのものが示すところの人間の実存的意義を奪つてしまうことになり、今一方のイエスに対する加害者になつてしまつてはならないかと思つてはいます。

二

イスカリオテのユダについて言えば、イスカリオテをユダの出身地の名前を示す語とし

て理解しようとする人々がいます。又イスカリオテは元來、「短剣をもつ人」という意味の語から由来しており、ユダヤ教の一派である熱心党の中でも過激な行動主義者を指す語として理解する人々もあります。

いづれにしても、一人の人間の思想や行動を理解するためには、その人間の背影である出身地の自然的・精神的な風土や歴史的・時代的な政治や経済状況等をよく知り、それらが彼の思想・人格形成に及ぼした影響、導程などをよく知ることは重要な手がかりとなりますが、ユダの場合つまだらかにはわからないようです。更に、ユダがはたして聖書が言う通り、イエスの十二使徒の一人であったのかということに疑問をいだく者さえあり、又十二使徒の存在そのものを疑う者もあるくらいで、そのへんのところ決定的な明確さを欠くといったのが現在までの聖書学の立場であるようです。

これらのことは一応ここでは論外としておいて、ユダなる人物がイエスの死と深いつながりがあるということは確かなようです。問題はユダが聖書や聖書の説明するところを継承する謂所伝統的所説の通りにイエスを体制の権力者に積極的に買収したことが、イエ

スの死を決定的たらしめ、そして、そのようなユダの裏切り行為をイエスは予め知っており（ヨハネ6・70）、そうあるべくユダは運命的に定められていたのであり、加うるに悪魔にあやつられ悪魔の手先として働いた神に反逆する地上最大の大悪人だとするユダ理解は、イエスを神の子、唯一の救い主とみる教団の神学的宗派的観点より下された一方的な見方に偏しすぎてはいないかと思うのです。

従って、ユダを考える場合、イエスを裏切り、権力者に賣り渡した結果イエスは十字架にかけられ殺された。という結果のみをみて、ユダを大悪人だと決めつけてしまうことは誤りであると思います。

人が、ある思想や人物にひかれ興味を感じるといった場合、人それぞれの事情や立場、考えによって、その関わり方は異なります。

イエスに従った人々の場合も、それらの人達すべてが同一の思いや期待を抱いていたとは言えません。イエスに従った結果が、ある人々には期待通りであったでしょうし、他の人々には、おおむねそうであったでしょう。又ある人には全く期待はつれであったり、そ

のことが時間と共に明確になっていったという風であったかも知れません。更にまたある人にとっては、自分の考えや生き方の発展の踏台的な役割をイエスとの邂逅に於て為し、別なある人は、最初は共感を覚え協調して行けると考えていたにもかかわらず、そのうちに相互の考え方の相違が明らかになって来て分離しなければならなくなってしまった、ということだっていたにちがひありません。また次のような人だっていたかも知れません。即ち「最初は充分イエスを理解していたにもかかわらず、だんだんと理解出来なくなり分離するに止まらず、自からの考えや立場も不明確になって、ついに挫折し自己崩壊してしまつた人」

これらのことは特にイエスとの関わりに於てのみ生じることでなく、一般に人と人とが関わる時に生じることであり、従つて、人があることがらや、ある人に関わる姿はさまざまであり、一概に悪とか善とか決めつけることは出来ません。

ところが、ある人物やことがらが神格化され、それにかかわる教えが絶対化され、更にそれにもとづいて集団が組織化されるに至りますと、個人は組織の教条基準により善悪が

判定され、反教条、反組織的言動は忽ち悪の落印をおされてしまいます。

考えてみるとユダも、このような宗派的教条主義と、その組織により大悪人ときめつけられたのではないかと思えます。その意味でユダはある面では犠牲者、被害者の一人だと言えるかも知れません。

三

イスカリオテのユダが正しいと言うものではありません。

彼のみがイエスに対する最大唯一の悪魔的加害者であり、イエスはその被害者であつたという事で、ユダなる人物とイエスなる人物との評価又は関わりを語って、それですべてこと足れりとしてしまう。その姿勢が問題であるということを言っているのです。

イエスとユダとの関係は、人間関係一般の問題であり、ユダが加害者でイエスがその被

害者であると決めつけてしまふ以前に、イエスやユダをそのように追い込んで行つた社会的、人間的な直接間接の原因又は誘因といったことがらに眼を広く且つ深く向けなければなりません。

ある人間が結果に於て、ある人間を裏切るような行為に至るには、さまざまな理由があり道程があるということは既に述べた通りですが、そこには人間相互の考え方の相違というものがあり、それぞれの立場には、それなりの必然性があるのであって、結果のみを見て裏切つたのはユダで、裏切られたのはイエスだと判断してしまふことは、はなはだ単純すぎる結論の出し方だと言えます。

もし、ユダに辨明の機会を与えるなら、「裏切られたのは己れの方だ」と言うかも知れませんし、「イエスを十字架につけて殺したのは己れではない。殺つたのはローマ野郎や祭司たちだ、己れはただ、イエスについて行けなくなつたし、イエスを必要としなくなつただけだ。勿論、祭司たちから金をもらつて、その居場所を教え案内したが、それはものはづみというもので、イエスにこれ以上ついて行けないと思つた時、イエスを祭司たち

に渡そうなどとは考えてもいなかった。ましてや祭司たちがイエスを捕え十字架にかけて殺してしまふなどとは夢にも思っていなかった。結局己れは、ある意味でイエスに裏切られただけでなく、祭司やローマ野郎に完全に裏切られたのだ。世間の奴らは己れのことを大悪党のように言ひが、己れがどんなに悩み苦しんだか少しも理解しようとしなさい、考えてみると本当の大悪党は権力にあぐらをかき、その保持のみを考え、己れのみ正しいとする祭司やローマ野郎なのだ。己れはイエスと同じ被害者なのだ」と言ひやも知れませんが。従つて、ユダが加害者で、イエスが被害者だと言ひつて、ことの善悪を論じ、そこをいくらつづいてもユダをいよいよ痛めつけ、イエスに対する憐みの情をかきたてるのみで、それ以上何も出て来ないのではないかと思ひます。そして、この問題を加害者ユダと被害者イエスという関係の視点に立つてのみ論じることが、ことからの本質を問はず、出来ごとの表皮的な面のみ眼を向けることになり、結局追求すべき本当の問題点を不問にしたままイエスを中心とした集団の内紛としてかたづけてしまふことになりまふ。

私たちは時として、私たちの日常に生じる問題を、このように小さく狭く、且つ表皮的

な秩序意識・常識的・道徳的意識にとじこめてしまい、本当の敵・本当の問題点を見極めることなく、浅薄にか独善的にかに判断を下してしまいかねません。

そして真面目くさって祈るのです。即ち「どうぞ、ユダのような悪人になりませんように」「イエスが裏切り者のユダをも赦したように、私もユダのような人間を赦すことが出来ますように」と。

四

イエスとユダの問題は、政治や社会の在り方と深く関連しており、更に、つきつめると人間存在そのものの本質にかかわることがらであります。

すでに述べて来た通り、イエスとユダの関係又出来ごとを、彼らをとリまく社会や政治の在り方と関係のないこととして切り取り、切り取ったイエスとユダの問題を宗派的なドグマの上のせ処理して、こと足れりとしてしまうことは、正しくイエスやユダをとらえ

たことにはなりません。

このような処理の仕方の一つの例が「ユダがイエスを祭司に売るようになったのは、ユダの中に悪魔が入ったからだ」とか「イエスは最初からユダが自分を慮切る者だということを知っていた」とかいう論理でユダの行為を悪魔の業、イエスがユダに対してとった行為を神の子の敵しと愛という宗教的次元に於ける神の憐みの表れと理解して一件落着としてみまうのです。

しかし、このような問題処理の仕方からは、人間としてのユダの苦悩する生々しい生の現実とは全く不問にされ、更にイエスに関しては千里眼的な聖者であって、あのゲッセネの園で血のしたたりのような汗を地に流し、目からの身の処し方に苦悩して祈るイエスの生の現実などは消え失せてしまい、結局私たちの今日の生との接点を、どこにも見出すことが出来なくしてみまうのです。

そのうえに私たちをして、現実のさまざまな社会的・人間的諸矛盾を、いとも簡単に「悪魔の業」と理解せしめ、正しく問題に対処せしめる認識と意欲とを疎外せしめるに至り

為すべきことを為さしめず、結局現状肯定、体別維持者たらしめることになってしまわな
いでしょうか。これは正しく体制側の思ひつぼの中に落ち込んだことになってしまっています。
ここで今一度確認しておきたいことは、この文章の冒頭で述べた通り、イエスはキリス
ト教の開祖として生きた人ではなく、最も徹底した歴史の先駆者の一人として人間実存を
生きたお方だ、ということなのです。

イエスは自から、その時代に於ける人間的社会的な不条理や矛盾の中を神の御意志を志
向する信仰者の勇氣をもって、生々しく生きつつ、澄んだ眼力で、その不条理と矛盾との
根源を見抜いていられたのです。

イエスは、その人間的・社会的矛盾と不条理との発現体として律法学者やパリサイ人を
見ておいでになり、従って、彼らの言動をイエス自から「愛」に基づき言動により批判す
ることをもって、社会的・人間的な矛盾と不条理の根源に迫ろうとなされたのです。

そして、イエスの批判的言動が目ざすものは、ひたすら人間実存の在りようであったの
です。しかるに、イエスが真実、批判的言動行に於て目ざしている社会や人間の実存的在

りようを、パリサイやサドカイ派の人々又は民衆等は理解出来ず、自分たちへの批判は直ちに神に対する批判・叛逆と考え、イエスは神に逆り者、神を汚す者として裁いたのであります。

今一度言うならば、イエスは神や律法そのものを批判したのではなく、パリサイ人や律法学者達の独善的な神理解律法理解から表出して来る宗教体制と人間の生き方・人間の取り扱い方に対して批判したのであり、その批判を通して、正しい神理解、律法理解、人間の在り方などを示されたのであります。

故にイエスは、「わたしは律法や預言者を廢するためきた、と思つてはならない。廢するためではなく、成就するためきたのである」(マタイ5・17)と申されるのです。

しかし、パリサイ人や律法学者達が神を援用することで行つた宗教的権力体制の推進者又擁護者として自己を止め、その立場からイエスを見る限り、イエスの言動の真意は理解出来ないし、たとえ理解し得たとしても、彼らにとってはイエスは敵であつたと言えます。

また、体制の中にどっぶり埋没し、自己の主体性を権力に対して明確に自覚することなく、目前の利害得失により行動し、与えられた秩序に生きることを常識としている民衆にとっては、イエスは余りにも純粹であり、崇高である故に、結局最後には自から体制順応の安易な生き方を選ぶことにより、イエスを見捨てて自己保身をはかったのです。

更にユダの場合は体制批判という点では同調出来ても——この点ユダは自からの主体性を確立していることで民衆より問題意識を持つことに於てまさっており、且つ勇気があったと言えますが——イエスが志向し、イエスが立っていたところの人間実存の根柢が理解出来ず、早急に表皮的な体制革改のみに情熱を傾けた浅薄で独りよがりの思いと行動の故に、イエスから分離せざるを得なくなり、その彼の思いを体制側に上手に利用され結局権力者にイエスを売り渡すという羽目になってしまったのではないのでしょうか。

このような出来ごとは、人間が何ほどか、歴史を先駆的に生きようとする時、彼をとり囲むさまざまな人間との間に必ずといってよいほど生起して来る宿命的な悲劇であると言えます。

五

ユダが歴史の先駆者としてのイエスを理解出来なかつたといふことに於ては、民衆は勿論、弟子もユダと同類であります。従つて、イエスが逮捕され十字架で処刑されるに及んで、その多くは離散しすべてイエスに対して裏切者となつてしまふのです。

では、彼らがイエスを理解出来なかつた理由はどこにあったのでしょうか。これに関しては、既におおよそのことを述べて来たのですが、今少し厳密に考えてみますと、彼らが個人的視野でことがらを考え、ことがらに関わつて行つたのに対して、イエスは広く人間の在り方を現実に則して社会的・歴史的視野で考え、関わつて行つたといふことです。

個人的視野でことがらに関わり、ことがらを考えるといふことは、自己の狭い信念、即ち宗派的な独善的宗教信念、又は分派的な独善的政治信念、さらに常識的な道徳的秩序意識等で、ことがらを考えるといふことであります。

それらに共通することは、人間の在り方を社会的・歴史的な視野に立つ

て人間であることを考えず、自己の狭い信念、ないしは特定のイデオロギ―を基礎として
ことがらを見、考え、判断してしまふということであり、それも、このようなこと
がらについての考え方、在り方、関わり方が偽善なのであります。

それにひきかえ、人間の在り方を社会的、歴史的視野で考え、関わって行くということ
は、人間というものの在り方を相互の連帯性の中で自由に在る者として、その連帯なり、
自由なりを守るため、それを犯す一切のものを社会的歴史的な視野に立って見きわめ、拒
否しつづける在り方のことです。いいかえますと、人間が相互に人間であることを保ちつ
づけようとする在り方のことです。

イエスは終始この視野^{レキヤ}及視点^{レキヤ}に立って一切の行動をなされたのであり、――その視野又
視点にイエスをして立たしめた根拠がイエスの信仰・イエスが神に在るといふことなので
すが――こうしたイエスの生き方は当然のこととして、宗派的独善的宗教信念にもとづい
て権力体制をつくり上げ、民衆支配を行っていた祭司達を代表とする宗教的政治体制の支
配者からは反逆者として抹殺されねばならなかつたのです。

また、植民地支配を遂行する段階で、ローマの権力者側からは不穩分子として拒否されねばならなかったのも当然であります。

更に体制がつくり出す秩序意識の中で自己保身だけを願って安易に生活する無思想な民衆には、とうていイエスの真意など理解出来なかつたのです。

そして、個人的視野、視点でことさらに関わって行き崩かいした典型がほかでもなくユダその人であつたと言えます。

ところで、ここでイエスについて確認しておきたいとは、イエスは決して反ローマ・反ヘロデ・反ユダヤ教を唱えたり、民衆をそのために扇動しようとしたのではないといふことです。

当時のユダヤにも反ローマ帝国主義を旗印として政治的独立を望み闘う宗教的勢力がありました。しかし、彼らの闘いの根拠には、神聖なる選民としてのユダヤ民族の王支配、又は異民族ローマによる支配を否定し、自からは神政政治を主張したところにあるのであつて、イエスの考えや立場とは全く異つていました。

民衆の側から見れば、ローマによる支配も、ヘロデによる王支配も、ユダヤ教の急進派の主張する神政政治も本質的には同じものであって、しよせんは先述した通りの個人レベルに立つ独善的なイデオロギー絶対化による支配にしかすぎず、それによって人間を本当に救うことなど、とうてい出来ないものであって、それらはイエスの言動によって立つ視点とは明確に区別されなければなりません。

イエスご自身は自から構築した理論や信衆思想理念の実現のために行動されたのではなく、そのような先述の通りの個人レベルでものごとを考え、関わるような行動を拒否し、むしろそのような在り方を克服して、人間が相互に人間であるような関わりに生き得るために、ひたすら生きられたのです。即ち「安息日のために人があるのではなく、人のために安息日がある」という、そのイエスの言葉が示す、ところをイエスの心として、しっかりと見きわめておく必要があります。

しかし、イスカリオテのユダは、このイエス集団固有の信条、理論としてのイデオロギーをイエスから望み、それによって社会的な働きを望んだのかも知れません。

六

人間が人間であるために、人間としてあたりまえのことを語り、行動しつつ、とことんまで生きつづけようとする時、人間は死なねばならない。これ程人間にとって矛盾はない。イエスの十字架の死とは、この矛盾以外の何ものでもない。このイエスの生と死に比べるなら、ユダの生と死など、も早や陳腐な人間の日常的な出来ごとの中に同化されて無きに等しいものとなってしまいます。

なぜなら、ユダはイエスを裏切る以前に、すでに人間としての自己を裏切っているし、そのいう意味では私たちも同類だし、人間がこの世の現実を生きつづけるためには、人間としての自己を何らかに於て裏切ることなくして存在しつづけることは出来ないからです。これは人間の生そのものの最大の矛盾であります。

パウロは、この人間存在の現実を次のようにロマ書に記しています。

「わたしたちは何かまさったところがあるか。絶対にない。ユダヤ人もギリシヤ人も、ことごとく罪の下にある。次のように書いてある。・我人はいない、ひとりもない。∴

…善を行ひ者はいない、ひとりもない。…彼らは、その舌で人を欺き、彼らの口は、のろいと苦い言葉とで満ちている…。」(ロマ3・9-18)人の世は自己を人間らしく生きようとする者を抹殺してしまひ醜悪さをもっています。結局イエスは、この人間の醜悪な矛盾に殺されたのであつて、イエスの十字架の死とは、そのことの証言であると言えます。

考えてみると、ユダは、この人間の醜悪な矛盾の中で自ら挫折した一人の被害者であり、イエスは、その醜悪な人間の矛盾によって殺されたのであるとも言えます。

しかし、福音書はイエスの復活を語ることにより、人間存在の醜悪な矛盾としての生の現実を人ならず、神こそが克復せしめて下さるのだということを語っているのです。

そして、このイエスの復活を証言することにより、人間をして人間として生きる勇氣と希望とを与えようとしています。

それ故に、ユダとイエスとの生を決定的に分つものは、ユダは自己の生の根柢にそれを持っていたのにかつたのに対し、イエスは自からの生の根柢にそれをもち、それを自己存在の

根拠としていたということです。

ですから、ユダが何如程、自己反省をし悔いたとて、も早や 自己がその矛盾の中で自己自身で在りつつづけることは絶対に出来ず、尚も自己自身で在りつつづけよりとする時、人間としての自己自身は挫折し崩壊するよりほかありません。

これは、神なき人間の生の現実であります。

七

元赤軍派の大学生が獄中で自殺したというニュースが過日の新聞に報じられていました。彼らの獄中自殺は二人目です。このニュースに接した世間の人々の中には、馬鹿を奴らだと苦々しく一笑に付してしまつた人が多くいたかも知れません。

しかし、彼らの自殺はユダの自殺と心情的に相通じるものがあるように思うのです。

彼らの自殺は、謂所革命えの行動の挫折によるものではなく、革命への情念にとりつかれ、しかるべき理論によって戦った人間としての自己自身の内なるものの挫折崩壊によるのではないでしようか。

人間にとって、唯一の正義実現の理論であり、哲学であると固く信じ、自からはその実践的具現者としての人間開放の正義の士であることを信じて疑はなかつた確信が崩壊しなうてはならない自己の矛盾にぶつかつたからではなかつたでしようか。

カッコよい理論と正義えの情念でもって、現実社会の矛盾に、一応勇ましく切り込むことは出来ても、その切り込みが、切り込んでいる自己をも含めた人間自身に向けられる時人間がその本質にもつ存在に於ける自己矛盾の固く醜悪な壁にぶつかるに至って、その唯一絶対の正義の理論の幻想性が暴露され、更にその理論にもとづき熱情をいだき行動して来た自己自身の偽善性・偽善性に遭遇せざるを得なくなる。その時自からが犯して来た行為が敵いがたい痛恨として己れをさいなみ、一切が虚無と化し、勢い己れを絶望のどん底に突き落す。も早やそこでは、いかなる居面りも許されず、彼の良心は自からを死に追いや

るまで安まらなくなってしまうたのではないでしょうか。

人間は時として、ある理論を絶対化し、それに捉われ熱情をもって、自己をその中に埋没せしめるとき、必ずといってよい程自己自身を裏切ってしまう。しかしその裏切りの行為が何らかの切っ掛けで自己認識される時、自からを救いようのない虚無の深淵の中に投げ込んでしまうのです。

このような人間存在の窮境を自から弁えることなく正義を口にし行動するものは、とてつもない思いあがりであります。

しかし、考えてみると、この自己矛盾の中で挫折し、自からを死に追いやっただ若者の姿は、あまりにも人間として悲愴（かなしくいたましい）であり、かつ悲壮（かなしく勇ましい）であつたと言えます。

なぜならば、彼らは素直にその挫折の中で自から苦悩し、いかなる意味に於ても、ほおかむりや居直りをしなかつたからです。

それに比べ、人間の自己矛盾を、あたかも科学が発見した必然性や法則性の前が安堵し

て、それを当然のこととし、自己の矛盾に対して体よくほろかむりをし、居直りをして正義の士づらして、ずうずうしく生きてゐる大人が世間には何と多くいることか。

そのような大人と呼ばれる人間の心の内深くにどす黒く動めくものは偽善性と、ひたすらなる物慾と権力慾以外の何ものでもありません。このことについては謂所右も左もなくすべて同じ偽善の穴のむじなであると言えないでしょうか。

それ故に、ユダ的な自己崩壊による自殺は、あまりにも悲愴であり、悲壮であると言へるのです。

一体誰が、ユダや赤軍学生の自殺を一笑することが出来るでしょうか。誰にも出来ない。少なくとも私はしてはならないと思います。なぜなら人間は自己を裏切ることなくして一日も生きつづけることは出来ないからです。それ故に、自己の醜悪さに何らかのほおかむりをして生きつづける私たちは、ユダ以下の愚劣な人間であるかもしれませぬ。

このような醜悪な人間の自己矛盾についてパウロは自から慟哭の声をはりあげて次のように語っています。

「わたしの内に善なるものが宿っていないことを、わたしは知っている。なぜなら、善をしようとする意志は、自分にあるが、それをする力がないからである。すなわち、わたしの欲している善はしないで、欲していない悪は、これを行っている。……わたしは、内なる人としては神の律法を喜こんでいるが、わたしの肢体には別な律法があって、わたしの心の法則に対して戦いをいどみ、そして、肢体に存在する罪の法則の中に、わたしをとりこにしているのを見る。だれが。この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」
(ロマ書 7・16―24)

しかし、この悲愴で悲壮なるユダヤ赤軍学生の死を、も早や陳腐な人間の日常的な現実の中で猿芸居のように無化させてしまふまでに壮烈で崇高に人間の現実を人間として生きぬいた人がいる。これこそ、イエスその人であったのです。先述のパウロはこのイエスに絶望の中で邂逅するのです。それ故に彼は先述の慟哭の声をして「ああ、わたしたちの主イエス、キリストによって、神に感謝すべきかな……この死ぬべきからだをも、今や生かして下さるのである」(ロマ書 7・25―11)と観喜の呼び声に愛えしめられるのです。

イエスの生を、なぜ私たちは見すごしに出来ないのだろうか。それは、イエスが神のよりに「聖く」生きられたからではなく、人が誰しも人間として本来の自己に誠実に生きよりとする時、必ずといってよい程、突き当るであろう、人間の生の矛盾、不条理に対し何如なる意味に於ても、自からほおむりや居直りをせず、どこまでも人間としての実存をつらぬき通し生きたからではないでしうか。

それにしても、ときとして、この世の哲学や宗教などが、人間の生の矛盾や不条理について正面からとりくむことなく、居直りやほおむりの論理の役割をはたすことがあります。従って、それらの哲学や宗教が一流であるか否かということは、人間の生の矛盾や不条理に対して、どれほど居直りやほおむりの論理をしりぞけ、人間の生の現実に対し誠実に人間として生きぬかせ、いどんで行かせる論理と情熱を与え得るかということによって判断されなければなりません。

同時に一流の思想家、一流の哲人であることの最低の条件は、その思想、哲学を自からの行動によって生きて示しているか否かということによってのみ判断されなければなりません。その意味で、例えばマルクスの人間社会の矛盾に対するいどみ方は一流であった一つであると申せます。彼は人間社会の経済的からくりを深く分析し、暴露し批判し、その正しく在るべき姿を示すことによって、人間が人間であることを疎外する経済的社会的政治的条件から人間を開放し、人間を人間として在らしめようと熱情を傾けた誠実な思想家、経済学者、哲学者でありました。

しかし、彼の誠実な意図は、後のスターリンなどにみられる如く、政治的宗教化現象を生ぜしめ思想や理論が教条的に優先し、独善的となつて、世俗的政治体制になりさがってしまったことは残念なことであります。

世俗的とか、この世的とかいうことの意味は、その論理や行動の中に、人間存在の矛盾に対して、なんらかの居直りやほかかむりの論理を秘めているものことであります。つまり、人間の現実の矛盾や不条理を結局是認し、その線にそつて立てられた論理のことを

言うのです。

この場合、聖なる領域—政治に於ける場合は、その政治体制がもつ理念—を観念的に現実とは別に設定し、自からは、けっこう世俗の中にとっぷりつきながら、別に観念的に設定された理念としての聖なる領域について思い、語ることによって、自からは、あたかも世俗の矛盾や不条理には、あづかり知らない生を生きていくかのように確信している。謂所観念によって現実をかかえ込み、すりかえてしまっていることを知ってか知らずにか、自からは気づかない心情的生の独善と偽善の生の有様のことをも言うのです。

今日キリスト教は、キリスト者自身による内部からの総点検の必要が求められておりますが、それは一つには、キリスト教が現実を伝統的な教義ドクトリンにより、ともすれば独善的な観念的抱え込みを行い、それでよしとしていた偽善性に対する反省でもあります。

更に、現在思想についての反省も、根本的には人間の現実を各々の思想のイデオロギ―により抱え込み、その思辨により現実の矛盾や不条理を処理しようとする独善的な偽善性に人々が眼覚めて来たことによるのだと言えます。

特にキリスト教に於ける場合、教義の中心の一つである「贖罪」の論理や信仰が、本来はそのような役割をもっているのではないにもかかわらず、現実に対する、ほおかむりや居直りの論理としての誤った役割をはたしてしまっているように思ひます。

即ち、「罪人であるにもかかわらず、キリストにより罪人のままで救われる」という人間救済の論理が結果に於ては、人間の現実の諸矛盾や不条理に対し、正しくい・ど・ん・で・行・く・こ・とを安易に放棄させる役割をはたしている一面があるといふことです。

その結果、現実を肯定せしめ、贖罪による人間救済が現実より浮き上り幻想となり、その幻想の聖なる領域にもとづく共同体を作る結果になつてしまつていゝといえます。

九

保守的といふことが、現状維持、現状肯定といふ意味に解するならば、現状の矛盾、不

衆理をみすえて、それを打ち破り乗り越え、よりよい状況を生み出して行こうといども、勢の欠如という意味に於て、それは好ましからざる態度だといえます。そういう意味に於ては、イエスは決して保守的な人間ではありませんでした。

だからと言って、すぐにイエスを社会変革を志した謂所急進主義者ソシヤリストであつたと言ひのてはありません。

イエスを保守主義者とか革新主義者とかいふ類型にもとづき、そのいづれに属する者かという決めつけ方はしてはならないと思います。

そのような類型的な分け方にあてはめてしまうと、どうしてもイエスの行動を検討してみると、当てはまる部分とそうでない部分とが出て来てしまつて、勢い当てはまる都合のよいところだけを、ことさらに強調しなくてはならなくなります。即ち先に述べた個人レベルでことごらを考える独善におちいつてしまいます。

イエスが、いかなる意味に於ても、人間の生の矛盾や不衆理に対して、居直りやぼおかりをしなかつたといふことは、人間というものの在り方を相互の連帯の中で自由に交わ

り在る者として、その連帯なり、自由なりを犯す一切のものを拒否しつづけるところに人間として生きつづけることを守り抜こうとされたということにほかなりません。

従って、あたかも進歩的で革新的なことを口にしていても、一旦問題状況に遭遇するや勿ち常識的世俗的な道徳や秩序をもち出して保身をはかるうとする者は、そのイエス理解の観念性、その信仰の偽善性を自から暴露することになるのです。案外、伝統的なキリスト者はこのような体質をその内に秘めているように思うのです。

このような体質は、最近に起った一連の事件、即ち万博問題、教会闘争、成田空航問題等に於て暴露されたように思うのです。

問題は、保守が悪く、革新がよいといったことではなく、私たちはイエスが何如なる意味に於ても、人間の生の矛盾にも不条理にも、自からほおかむりをしたり、居直りをしなかつたということ。更に宗教的、政治的な自からの観念的な聖さの中に現実を抱え込むことをせず、勇気をもって堂々とした態度で、偽善なる政治家や宗教家が見すてて行つた一人一人の人間を愛をもって拾いあげ、その人が深く内にもつ生命の苦悩に親く係わつて行

く生き方をされたという、その生の現実をしっかりと見すえねばならぬということです。そこには、誰にもまして、するどく、きびしい人間批判があるのです。

私たちは今日、私たちの生活の現場で、今一度このイエスの生きざまを注意深く見すえ自己検討したいと思えます。

更に一歩進めて、そのイエスの生きざまを生きざまたらしめたところのイエスの立っていた根柢なる神を、深い信仰的眼力をもって自からの生の根柢に据えたいものだと思います。

その意味に於てユダ的な生からイエスの十字架の死と復活を見ることにより救い出されたいと思えます。